

全国美術館会議機関誌  
全美フォーラム

ZENBI FORUM

全国美術館会議機関誌

## 全美フォーラム

ZENBI FORUM

01

F-02

能登半島地震の初動対応について

富山県美術館 以倉 新

02

F-05

美術館のサステナビリティとは

森美術館 片岡真実

03

F-08

総務課長！必見の事実～『セキュリティと環境活動家』

東京富士美術館 杉浦 智

04

F-11

学芸員をめぐるシンポジウムに参加して

呉市立美術館 横山勝彦

05

F-14

「女性と抽象」展について—コレクションとジェンダー

東京国立近代美術館 小川綾子、小林紗由里、佐原しおり、堀田文、松田貴子、横山由季子

06

F-17

現場の声を聴く

高知県立美術館 安田篤生

07

F-21

クラウドファンディングの手法について

個人会員 栗原祐司

08

F-24

池田満寿夫アトリエ作品の行方

個人会員 五十嵐 卓

# Kumahira

www.kumahira.co.jp

美しく守る技術

## 空気質改善

ケース内の空気を循環させるファンユニット

### 化学物質吸着フィルター

展示物に悪影響を与える酢酸ガスやアンモニアを吸着。ケース内における化学物質の発生をなるべく少なくできるように、使用する素材にも配慮しています。

### 調湿剤ボックス

調湿剤ボックスを通過することで、一定の湿度に保ちます。

### 収納庫内装にも

使用される調湿建材

### キュアライトS

展示床面の調湿建材「キュアライトS」が湿度環境の安定化をサポートします。

## 鑑賞性アップ

### 高透過ガラス・高演色LED照明

ガラスはフロートガラスと透明度の高い高透過ガラスの2種類からお選びいただけます。照明は標準仕様として調光可能な高演色LEDを採用し、さらに色温度の変更も可能な調光調色仕様もご用意。展示物をありのまま美しく魅せます。

クマヒラミュージアムケース

# ART CELLAR SERIES

アートセラーシリーズ

展示物を湿度や有害ガスから守り、鑑賞性を高める

株式会社クマヒラ 本社 〒103-8314 東京都中央区日本橋室町2-1-1 日本橋三井タワー14階 TEL.03-3270-4381  
株式会社熊平製作所 〒734-8567 広島市南区宇品東2-1-42 TEL.082-251-2111

詳しくは  
WEBへ



以倉新 *Arata Iwano* (富山県美術館)

2024年1月1日16時10分、石川県能登半島を震源としたマグニチュード7.6、最大震度7（石川県輪島市と志賀町で観測）の「能登半島地震」が発生、周知のとおり能登半島を中心に甚大な被害が発生した。当館は、全国美術館会議災害時連絡網の北信越ブロック本部館（副本部館：石川県立美術館）を昨年度より務めており、初動対応について報告する。本部館としての対応は、時系列で次の通りである。

- ・ 1月1日18時過ぎ：『大災害時における連絡網実施要領』に基づく連絡（紹介）「ファックスを北信越ブロック45館に送信。（なお北信越ブロックは当館含め全47館だが、この時点で送信名簿の更新国立工芸館、R5年度加盟）が出来ておらず、後日更新）」
- ・ 1月2日17時30分：各館の返信状況の速報を災害対策委員会メンバーリストで報告（回答28/46館。被害あり9館/支援要請なし）※なお各館の情報を集約した一覧は集計が間に合わず未添付
- ・ 1月4日15時30分：被害状況報告 暫定第1報（回答38/46館。被害あり11館/支援要請なし（今後必要になるかも1館））※この時点で、返信がなく被災が心配された石川県七尾美術館及び石川県能登島ガラス美術館に架電。電話が通じ被害あるも職員全員無事との話が聞けひとまず安心した。（石川県能登島ガラス美術館の様子は、石川県七尾美術館を通じ確認）

- ・ 1月5日17時10分：暫定第2報（回答42/47館※国立工芸館追加。被害あり11館/支援要請なし（今後必要になるかも3館））
  - ・ 1月7日14時：暫定第3報（回答45/47館。被害館数、支援要請とも変化なし）※返信のない長野県内5館について架電確認（うち4館が冬季休館中または展示替え休館中）。2館に連絡がつかないが、他館状況から被害ないものと思われる旨、報告。
  - ・ 8日11時現在：暫定第4報（回答45/47館。被害館数12館、支援要請なし（今後必要になるかも3館））※確認中だった石川県立美術館に架電確認し被害状況追記。
- なお、この第4報を持って最終報告とした。

振り返って、発災直後には能登地域の甚大な被害状況は分からず、県内を含め報道等で徐々に知ることとなったように思う。富山県内でも能登に近い県西部の水見地域では大きな被害が出ていた。当館も軽微とはいえ被災し対応に追われる中、返信のない、被災したと思われる館に架電確認等することは、タイミングも含め躊躇われたが、幸い今回はどの館も人的被害なく、しつかりした声をお聞きし安堵した。

なお、当館は、2023年6月の総会を持って、新潟県立近代美術館より北信越ブロック本部館を引き継いだ。それまで副本部館を務めるも本部館にほぼ頼っており、引継ぎ後、同館の指示を得つつ連絡網のファックス番号の登録までなんとか済ませていた。そのため発災直後に各館に一斉ファックスを送ることができたが、これが引継ぎ直後だと一層混乱しご迷惑をおかけしたと思う。日ごろの備えと年1回の連絡網訓練の大切さを改めて実感した。また今回は副本部館（石川県立美術館）の方が被害が大きかったが、本部館被災時に、すみやかに副本部館に業務を引き継げるよう体制を整えておく必要も痛感した。

以下余談ながら、発災直後の様子である。

地震発生は元旦夕刻であり、美術館は休館中で、筆者も美術館から車で30分程の自宅で強い揺れを感じた。富山県は震度5弱〜強で、強い揺れがしばらく続いたが、幸い自宅に被害はなかった。揺れがおさまりしばらくして、開催中の企画展（「金罫ロードショーとジリ展」）担当から、市内におり館の状況を確認しに行こうと思うとの一報が入った。

一瞬迷ったが、自身もすぐに行くこととし現地で落ち合うこととした。迷ったのは、美術館が神通川と、川と並行に海に通じる運河（富山運河）の間に立地し、地震発生直後からNHKのラジオ・テレビで、津波への警戒・避難を呼びかける切迫した調子の災害報道が繰り返されていたからである。館は海岸まで直線で約6km、富山県は地震が少ないこともあつて（震度5強は観測史上初めて）、これまで津波を意識したことはなかったが、津波警報が発令され、海岸、河川に近づくくなというアナウンスが続く中、改めて判断を迫られることになった。館に向かう判断をしたのは、16時35分（地震発生から25分後）、すでに富山港に津波第1波が着岸、高さ約80cm程度で被害なしとの報道があつたからである。しかし車で館に向かう途中、海側から避難してきたと思しき車と多数すれ違うこととなつた。因みに館の海拔が約6m余りだということは、後で確認した。

17時過ぎに館に到着。担当と二人で館内を確認したが、幸い建物に大きな被害なく、展示室では可動壁が若干ずれたり展示中の資料がケース内で倒れたりしたもの、翌2日に片付ければ3日から予定どおり臨時開館（通常4日開館）できるとの見通しを得た。ただし書庫は本が散乱し、収蔵庫内で絵画作品が1点、ラックから落下し額が破損するなどの被害は出ていた。1時間ほどで、家族が避難所に避難を始めていた同僚を帰宅させ、筆者は全国美術館会議の連絡網ファックスを送信し退館した。

その夜から、県や巡回元など各所と調整の上、2日に参集職員で片付け、3日より開館。ジブリ展は日時指定制ということもあつて、また余震も続く中、3日は2200人、4日は2800人を超える観覧者があつた。来館者の表情は一様に明るく、ほっとした様子でもあり、職員一同、開館出来てよかったということ、いつも通りの生活を続けることの大切さを感じることもあった。なお、被災された皆さまへのお見舞いを申し上げ結びとしたい。

## 02 美術館のサステナビリティとは

片岡真実 *Mami Katataka* (森美術館)

2015年に人類すべてが取り組むべき「持続可能な開発目標（SDGs）」が設定されて、今年で9年目。2030年のゴールまでに残すところ6年となった。この間、美術館に関わる国際機関では気候変動への対応についての議論が重ねられ、いくつかの新しい基準が提示されている。実際、美術館運営を巡る国際会議で気候危機や持続可能性が話題にならないことはない。2019年のICOM京都大会第34回総会においても「決議1…「我々の世界を変革する…持続可能な開発のための2030アジェンダ」の履行」が確認され、「二酸化炭素排出量を含む環境への影響を認識して削減し、地球上のすべての住民（人間とそれ以外の生き物）の持続可能な未来の確保に貢献することにより、我々自身、来館者、そしてコミュニティにより影響を与える」ことが合意されている。美術館活動全体のエコロジーに関わるこの問題は、単館での取り組みではなく、ミュージアムセクター全体が関連事業者や機関とともに動かなくては効果に繋がらない。本稿では、世界の主要ミュージアム館長による非公式の会議体ビゾ・グループ（ルーブル美術館、MOMAなど約50館が参加）が提案する「ビゾ・グリーン・プロトコル」について紹介しつつ、我が国が取り組むべき方向性について考えてみたい。

ビゾ・グループは2014年11月にすでに「ビゾ・グリーン・プロトコル」を発表しており、その「更新版」が2023年9月に公表された。意思表明には「美術館が気候変動と自然の非常事態に対して危機感を持ち、働き方や取り組みに変化をもたらす必要性があると認識している」とあり、美術館が環境的に持続可能な方法で長期的なコレクション管理に取り組み必要性、美術館業務のすべてのレベルにおける積極的・戦略的な関与を踏まえ、「より環境に配慮した美術館活動の実践」を最優先することを提案している。

「更新版」に加わった項目の大きなものは、輸送方法とクーリエに関する記述である。輸送方法については、「より環境に優しい輸送方法」、低炭素排出の選択肢として、海上輸送、道路輸送、鉄道輸送を推奨している。これまで美術館活動は収蔵品の貸し借りや人の移動を通して国際的に交流・発展してきたわけだが、今日の気候危機に際してはこうした歴史も再検証されるべき段階にあるという。日本では国際間輸送に陸路が使えないため、美術館業界と美術輸送業者が一体となって二酸化炭素を中心とする温室効果ガス削減の方法を協議し、方向性を定める必要があるだろう。「ビゾ・グリーン・プロトコル」では、貨物の混載や作品貸与計画における柔軟性なども奨励している。まずは現状の排出量の把握、削減に向けた分析から始めたいところだ<sup>2)</sup>。

クーリエについては、バーチャルクーリエという考え方がコロナ禍下で急速に拡がった。この経験によってビゾ・グループは「バーチャルクーリエが安全かつ実用的で「望ましい選択肢」であることを、貸出し側と借受け側の共通認識とする」という考えに至った。これが常に可能だとは限らないが、クーリエの派遣は「最終手段」とされている。日本では出張費の限られた学芸員が、作品貸出先が経費を負担するクーリエ業務にあわせて視察やリサーチを行うことも珍しくないが、今後はバーチャル優先による影響もあると考えた方が良く、少なくとも一展覧会にクーリエが多数渡航するようなケースは減少していくだろう。

ビゾ・グループは2014年時点で、従来の温湿度範囲よりも柔軟な温湿度管理を提案している。具体的には摂氏16から25℃、相対湿度40から60%、24時間毎の変動±10%としている。これに早々に置き換えよ、という提案ではなく、それぞれの美術館が置かれた気候条件や作品や素材固有の保存ニーズに配慮する一方で、各館のサステナビリティの目標に基づいた基準を考慮して欲しいという。必要以上に厳格な温湿度管理によって空調等のエネルギーコストが高くなることを避け、環境への配慮を最優先する考えに基づいている。2011年の東日本大震災時の節電の際には、全国美術館会議からも空気環境に関する柔軟な考え方が提案されているが<sup>3)</sup>、そうした考え方を恒常的なものにしていく必要がある。

さらには、展覧会の会場構成や設営作業における廃棄物削減、資材の再利用の推進も課題である。これには国際間輸送に使われる木箱(クレート)も含まれる。国立西洋美術館、アーティゾン美術館など個別館ではすでに試行が始まっている。

美術館における環境への配慮は、今後基本的な実践となり、そうした配慮の無い館には海外主要館からの作品借用が困難になることも考えられる。全国美術館会議としてもICOM日本委員会や日本博物館協会、さらにはメディア事業部、輸送業者、展示業者などと共同で作業部会を立ちあげ、2030年に向けて我が国のミュージアム・セクターが採用できる新しい基準を定めていく必要があるだろう。

1 ICOM 京都大会2019 報告書 日本語版 [https://comjapan.org/wp-content/uploads/2020/03/JP\\_ICOM2019\\_FinalRptport.pdf](https://comjapan.org/wp-content/uploads/2020/03/JP_ICOM2019_FinalRptport.pdf)

2 英国の慈善団体GCCC(ギャラリー気候連合会議)には、ユアルアートセンターを横断する800以上の個人や団体が加入している。GCCCは「低炭素排出量を知るためのオンライン・カリキュレーター」も無料で提供している。 <https://galleryclimatecoalition.org/carbon-calculator/>

3 節電時の空気環境づくりの考え方に關する指針について <https://www.zenbi.jp/getMediaFile.php?file=filc-23-14-filc-1.pdf>

# 総務課長！必見の事実！『セキュリティと環境活動家』

## ICOM-ICMS 東京大会2023に参加して

杉浦 智 Satoshi Sugimura (東京富士美術館)

2023年は関東大震災から100年の節目であり、美術館の防災・防犯に改めて注目が集まる中、国際博物館会議・博物館セキュリティ国際委員会（ICOM-ICMS）の年次総会を東京で開催することができた。ハイブリッド形式でオンライン参加を可能にし、15ヶ国から約140名の関係者が集い、防災セキュリティ分野の専門家や研究者が意見を交換した。

本大会の目的は、美術館作品の盗難、紛失、棄損事故や自然災害による被害が増加する中、日本の美術館セキュリティの意識向上と体制構築の重要性を探ることにある。テーマを「地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築」連携が生む相乗効果の事例研究」と掲げ、3名が基調講演を行い、12組13名が事例研究を発表した。また特別講演として、米国のJ・ポール・ゲティ財団のロバート・コム氏が、この一年間に発生した美術館における被害の実態を50件紹介した。日本でも未報道の事例が多数あることが明らかになるとともに、これほど、美術館が標的になっていることに驚愕させられた。

彼等と情報交換する中で認識を新たにしたことは、美術館セキュリティの分野では、毎週のように様々な事件や被害が世界の至る所で発生しているということである。驚いたことに欧米では美術館における事件や被害情報を、専門職員が世界中から常時、収集しており、これらの情報を世界の美術館と共有することの重要性を認識した。加えて、

インバウンドが急速に回復している我が国にとっても、それらの情報が有益なものであることを強く実感した次第である。

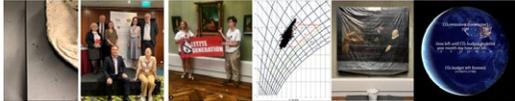
発表された事例研究の中で、環境活動家による美術館襲撃について、被害を受けた美術館から具体的な事例の紹介があったので取り上げてみたい。

ドイツのハツツ・プラットナー財団の警備責任者であるニコラオス・ドカリス氏は、環境活動家によるクロード・モネの作品《積みわら》への襲撃を報告した。彼は、環境活動家が美術品を襲撃した時の監視カメラがとらえた映像を、本会場で特別に公開し、分刻みで何がどう動いたかを説明した。その映像からは、襲撃する前の環境活動家たちの事前行動を読み取ることができ、警備員の動き、来館者の行動等々がリアルに映しだされていたのである。公開することはリスクが大きいため本会場のみとし、記録に残る小冊子等にも記載することができなかった。ここで知ったことだが、環境活動家たちは襲撃する日時と場所（美術館名）を、事前にマスクミに伝えていたということである。マスクミは美術館の襲撃を報道するために、事前に予告通りの美術館に集まり、カメラをもってスタンバイしていた。カメラクルーたちがいきなり多勢で展示室に現れてきたのだ。「予定のないマスクミが展示室に現れると、環境活動家が襲撃行動を起こすことが予測される」――ドカリス氏の指摘は、大変示唆に富むものであった。

この襲撃はハツツ・プラットナー財団での日常業務や来館者の鑑賞に大きな変化をもたらしたという。セキュリティ強化のため、来館者の服装規制を強化するとともに、液体物質の持ち込みを禁止し、全ての絵画をガラスで保護するなどの措置を講じた。また、覆面監視員の導入や新たな訓練を実施し、手荷物スキャナーや全身スキャナーの設置も行った。これらの対策は、入場時の待ち時間の増加やコストアップ、来館者からの否定的な声など、新たな課題を生み出しているという。しかし、環境活動家の活動は続いており、美術館は引き続き、警戒を緩めることはできない。大会では、ICMS会員で、

気候危機とリスク管理

博物館島での破壊行為10/20  
ロシアの対ウクライナ戦争 02/22  
環境活動家 08/22  
エネルギー緊急事態 10/22  
悪天候イベント 06/23



MUSEUMS BARBERIS  
DAS MIVSK  
MUSEUM

バルベリーニ美術館  
2022年10月23日 日曜日



「ラストジェネレーション」というグループの気候活動家たちは、美術館の2階の部屋B6にある、ハツツ・プラットナー財団が所有する1890年のクロード・モネの絵画「積みわら」に攻撃しました。

ICOM-ICMS 東京大会2023の詳細は、ICOM日本委員会のウェブサイトで開催されている



ベルギーの現役警察官が登壇し、警察側から見た、重要な情報も共有する場になったことを併せて記しておきたい。

そして、事例研究の最後には、ベルリン国立美術館・ラトナーゲン研究所のステファン・サイモン氏が「気候危機時のリスクへの対処―SPKタスクフォースのリスク管理」と題し、講演した。21世紀初頭、19世紀と20世紀を合わせたよりも多くの美術館が地球上に建設されており、中国では毎年約700の美術館が建設されているというのである。なぜ美術館が気候危機の議論で重要な施設になるのか。それは美術館がその面積に対して多くのエネルギーを使用するためと指摘している。それは美術品の保存に必要な恒温湿環境を維持するために、空調のエネルギー消費量が大きいとされているからだ。美術品収蔵庫や展示室は、文化財保護の観点からこのような環境が求められるため、エネルギー消費が特に重要な課題となっている。また、気候変動に伴う外気の高温・高湿度や電気代の高騰など新しい課題にも直面していることも指摘した。要するに、美術館は都市の中でエネルギーを消費する施設のトップにランクされるといふのだ。美術館が病院と医学校を合わせたよりも多くのエネルギーを使用していることを紹介し、リスク分析を行うと同時に、環境活動家と対話し、協力することを提唱した。

美術館が環境問題に対して取り組むことは、社会全体の環境意識を高める上で重要な役割を担っている。アートを通じて環境問題に光をあて、訪れる人々に考えるきっかけを提供する場となっていることも指摘していたことをお伝えしたい。

全国美術館会議加盟館には小冊子の報告書が送付されている。各美術館の総務課長に、是非高覧戴ければ幸甚である。

## 04 学芸員をめぐるシンポジウムに参加して

横山勝彦 *Kasuhiko Yokoyama* (呉市立美術館)

美術史学会(美術館博物館委員会)主催による「学芸員のキャリア・トランジション〈事例と功罪〉」と題されたシンポジウムが開かれた(2024年2月11日、大阪市立大学140周年記念講堂)。開催趣旨には、「学芸員なんて知らない!?―学芸員不要論を撃つ―」(2008)、「いまどきの新・学芸員―採用の現状と未来―」(2012)に続く、「学芸員というキャリアについて考える試み」であり、「キャリア転換を行った方々、敢えてこれを行わなかった方々など様々な方々に、ご自身の経験談をお話し頂きたいと考えました。」とある。

シンポジウムは、開会挨拶、趣旨説明に続いて、事前アンケートについての基調報告、基調講演、4名の報告者による事例報告と続き、休憩後、ディスカッションという内容豊富なプログラムであった。事務局によれば、会場の参加者は101名だったが、学生や若い学芸員にまじって館長クラスの大ベテランたちも数名参加しており、またオンラインによる配信希望者が325名に達したことからして、このシンポジウムが多方面で多くの関心と呼んだことが想像できる。

「現代の博物館における学芸員」の現状を概観した栗田秀法氏(躰学園女子大学)による基調講演は、学芸員をめぐる様々なレベルで多様な問題が存在することを明快に示した。事例報告では、1博物館から博物館へ、2博物館から大学へ、3民間企業から博物館、そして大学へ、4博物館と4つの区分から、横山勝彦(呉市立美術館)、野田麻美(神戸大学)、田中梨枝子(京都芸術大学)、奥村泰彦(和歌山県立近代美術館)が、それぞれの立場から

報告を行った。その後休憩を挟んで、ディスカッションという流れだったが、休憩中にオンラインで受け付けた質問も複数あり、ディスカッションに反映した。まさに内容豊富なプログラムだといえる。しかしそのプログラムを半日でこなすには無理があったのではないだろうか。残念ながら、問題点についての議論が深まらないままに時間が過ぎていった感がある。個人的な「事例」はともかく、「功罪」についてはほとんど触れることができなかったのではないか。今回のシンポジウムは結果的に、現在の「学芸員というキャリア」については、取り組むべき問題があまりに多いことを浮き彫りにしたと言えるかもしれない。事例報告に登壇した4名は、経歴も立場もさまざまで、まさに多様な学芸員像を示したが、与えられた20分では時間が足りず、それぞれの学芸員論を展開する余裕はなかったように思う。

私は、大学院在学中に主任教授から美術館への就職を勧められた際にお断りしていたにもかかわらず、今年学芸員になって40年目を迎えた。結果として人生の大半を公立美術館で過ごしたわけである。東京と長野で合わせて30年間地方公立美術館に勤務し、金沢で大学教員を5年、そしてまた現在地方公立美術館に勤務している。「トランジション」という観点では、新しい職場へとお誘い頂いた時に私の状況がうまく合致したわけで、全く幸運というほかはない。タイミングが合わなければこのような異動は実現していなかっただろう。

「美術館」と「学芸員」を問いつけ、論じ続けることは重要である。しかし、私は、国立（職名は研究員である）や、公立、私立といった設立者の違い、また論者の立場によって、「美術館」や「学芸員」という言葉の意味合いとニュアンスがかなり異なっているのではないかと感じている。

美術館から大学に移った時、長くお世話になっていた野見山暁治先生から「美術館と大学。どっちが楽しい？」という文面のハガキを頂いたが、このシンプルな質問に答えることは意外と難しい。それは両者が、全く別の価値観によって運営され、理想とするものが異なっているからに他ならない。特定の人々が集う大学とは異なり、美術館は観客を選ぶことができない。むしろ多様な人々が集うことを目標としている。大学が研究の質を基準とすることに対して、美術館ではその普及が課題となる。私は、今回のシンポジウムでは、昭和・平成・令和と地方公立美術館の現場に関わってきた経験から発言したが、40年間に美術館を取り巻く状況が大きく変化したことを強く感じたと同時に、美術館を論じる視点があまりに変化していないことを再認識することにもなった。30年前の全国博物館大会での林屋晴三氏の発言「博物館事業が何ぞや」というコンセプトが希薄なまま、ヨーロッパのシステムや考えを取り入れてきた」（『博物館研究』第28巻11号、1993年）という状況は、現在でも全く変わっていないのではないか。

最新の『博物館研究』の「令和4年度博物館園数関連統計」によれば、国立、公立、私立、大学を含めて全国には995の美術館がある。少なくとも館数以上の学芸員が現在美術館に勤務していることになるが、一体何人の学芸員が不安を抱くことなく、自らの状況に満足して仕事をしているだろうか。シンポジウムの際にオンラインの質問で、「美術史を学び、4月から美術館に勤務する」という大学院生にアドバイスを求められたが、私は、「美術史を学んだ経験を活かしながらも、大学での研究分野に拘り過ぎず、目の前の仕事に一生懸命に取り組む」ことを勧めた。学芸員は現場で成長していくものだからである。

# 05 「女性と抽象」展についてーコレクションとジェンダー

小川綾子 Ayako Ogawa  
小林紗由里 Sayuri Kobayashi  
佐原しおり Shiori Sahara  
堀田文 Aya Hotta  
松田貴子 Takako Matsuda  
横山由季子 Yukiko Yokoyama  
(東京国立近代美術館)

コレクションによる小企画「女性と抽象」展(2023年9月20日~12月3日)は、女性のアーティストによる抽象芸術についての展覧会が海外で相次いで開催されている近年の動向をふまえ、当館のコレクションを通して日本の女性の作家による抽象表現を再考する機会として小川綾子が発案した。企画会議では、女性の作家の再評価という世界的気運への一時的な呼応で終わるのではなく、今後も同様の企画を展開していく必要性が確認され、継続的な調査研究を視野に希望者を募り、小川含む計6人で企画するかたちとなった。

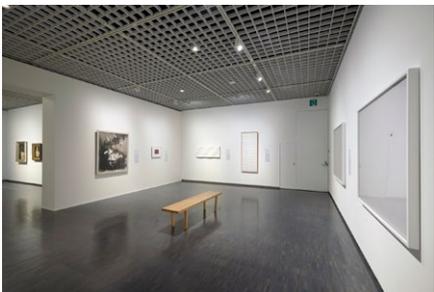
出品作家や作品についてのリサーチも6人で分担して行った。今回取り上げた作品の多くは、過去の展示歴も少なく、解説などもほとんどなかったため、作家の略歴や制作の背景など基本的なリサーチから出発した。その中で、当初気がつかなかった作家どうしの交流や連帯も浮かびあがってきたように思う。新たに解説を執筆する際には、使用する語彙にも注意を払い、男性中心に形成されてきた美術史を前提とした表現を無意

識にしていなかなど、入稿前に全員で読み合わせを行った。今回、発表当時の一次資料を広く調査することまではできなかったが、彼女たちが同時代の批評の中でどのように位置づけられていたのかを検証することが今後の課題である。

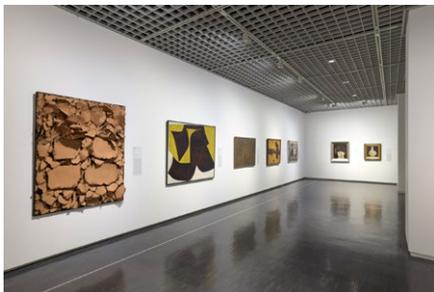
展示構成にあたっては発案者の小川のアイデアを軸としつつ、各スタッフの専門性を生かしながら出品作品を絞り込んでいった。時代やイメージ、制作技法に着目して3つのテーマを立て、16人の作家による25作品を展示した。第1章「女流画家協会」では三岸節子、桂ゆき(ユキキ)など同協会で活躍した画家たちの作品、第2章「増殖する円」では福島秀子や辰野登恵子などの「円」のモチーフが見られる作品、第3章「抑制と解放」では木下佳通代、杉浦邦恵などの1960年代以降のミニマルな表現手法の作品を紹介した。女性のアーティストが置かれてきた厳しい状況を示すため、インタビュー記事や、男性美術評論家による女性差別的な発言が掲載された座談会記事など、1960年代の文献資料も合わせて展示した。

開催後の反響としては、女性のアーティストと男性のアーティストが、歴史の上で社会的に非対称であることを改めて認識できたという声や、時系列に沿いながらも3つの異なる章立てによって多様な見方が出来た点への評価、このような企画を今後も続けて欲しいという声など、好意的なものが多かった。一部からは、「女性」という性別による括りがある事への否定的な意見もあった。

開幕直後に、Tokyo Art Beat(福島夏子記者)による企画者へのインタビュー取材があり、開幕から1ヶ月後にWeb記事として掲載された。この記事への反響は大きく、SNSを通して拡散された。その他に特徴的だったのは、展覧会の主旨に共鳴し、本展を紹介してくれた方が複数人いたことだ。主にジェンダー学やフェミニズムに関心の高い女性の編集者や文筆家たちが、ラジオ、雑誌など様々な媒体で、それぞれの立場から主体的に紹介してくれたのは特筆すべき点である。



東京国立近代美術館「女性と抽象」展 会場風景  
撮影：大谷一郎



東京国立近代美術館「女性と抽象」展 会場風景  
撮影：大谷一郎



東京国立近代美術館「女性と抽象」展 会場風景  
撮影：大谷一郎

冒頭にも書いたように、6人のチームで企画したことには今後の調査継続へとつなげるという当初の目論見だけでなく、さまざまな利点があった。毎回のチームミーティングにおいて、各時代、各領域の作家を取り巻く状況や経緯、問題点、留意点、各自の視点、参考文献等を共有することで、展覧会構成から自館コレクションのジェンダーバランスの不均衡、今後のコレクション形成の展望に至るまで、忌憚のない発展的な意見交換、スムーズな準備進行、偏らない調査が可能になった。

また、企画に名乗りを上げた館内の女性スタッフ6人に加え、会場配布用の冊子デザインも女性のデザイナーに依頼して、計7人でデザインに関するミーティングを重ね、展覧会コンセプトを反映した小冊子が完成したことにも言及しておきたい。今後も、性別を問わず、メンバーを入れ替えながら関心のあるスタッフで調査や企画を継続していきたい。

本企画を通して見えてきた課題として、作品収集や展覧会企画におけるジェンダーバランスの是正などが、小冊子に掲載された企画者座談会で挙げられた。特に、フェミニズムやジェンダーの視点から社会を読み解く実践を行ってきた女性のアーティストの作品は、当館のコレクションには少ない状況といえる。今後は、これまで評価されてこなかった女性のアーティストの作品調査・収集だけではなく、日本美術史におけるフェミニズム・アートの展開についても掘り下げることで、国外の類似した動向との関連や、アーティストたちのネットワークをより明らかにできるような作品の収集を目指したいと考えている。また、本展に続く小企画としては、フェミニズムと関連する映像表現やパフォーマンス作品に焦点をあてる計画も進行中である。

1「東京国立近代美術館はなぜ「女性と抽象」展を開催するのか。コレクションにおける女性の作家の再発見とジェンダーバランスについて担当者へ聞く」Tokyo Art Beat <https://www.tokyartbeat.com/articles/women-and-abstract-interview-202310> (2023年10月20日最終閲覧)

## 06 現場の声を聴く

### — 美術館運営研究部会の学芸員聞き取り調査について —

安田篤生 *Azusa Yasuda* (高知県立美術館)

一般社団法人全国美術館会議の美術館運営研究部会（以下「MRG」と略す）では2023年、美術館学芸員の現場の声を拾い上げるための聞き取り調査を実施した。その成果の報告は、本誌が出るころには全国美術館会議ウェブサイトで発表済の予定であり、また全体の分量もそれなりのものであるため、詳細はそちらをお読みいただきたい。ここでは調査実施に至る背景も含めて、その概略を記すことにしたい。

#### 調査の背景

制定後70年余りが経過した博物館法については皆さまご存じのとおり、2022年その一部を改正する法律案が可決、制定され、2023年4月から施行された。

法案提出以前、文化庁文化審議会内の博物館部会及びその下部組織である「法制度の在り方に関するワーキンググループ」では「博物館法制度の今後の在り方」を繰り返し議論し、まとめられた「答申」<sup>1</sup>が法改正の土台となっている。ワーキンググループでは館種・分野別の博物館・美術館関係団体へのヒアリングも実施し、<sup>2</sup>ここには全国美術館会議も参加した。

しかしながら、この「答申」に関する全国美術館会議事務局からの報告<sup>3</sup>にもある通り、令和の法改正で中心となったのは博物館登録制度の見直しであった。「答申」



全国美術館会議ウェブサイト

へ至る検討・議論の中では、学芸員制度の見直しも大きな議題ではあったものの、結論めいたものをまとめるに至らず、今後の課題として積み残しのまま法改正が行われたのであった。

しかし、現在、専門職としての学芸員の位置づけ、例えば、「雑芸員」から専門化・分業化へ、あるいは学芸員以外の専門職配置の必要性、さらには館の規模＝職員数の制約や雇用形態（正規・非正規、有期雇用）の問題もある。学芸員が働く現場の実状が複雑で課題をいくつも抱えている中、学芸員制度を今後見直すとするばどのような方向性がふさわしいのだろうか。そのためにも、現場の声を拾い上げていくことは重要であるといえる。

そこでMRGとしては、学芸員の現場における課題や今後望まれることについての調査を行うこととした。

なお、文化庁文化審議会内の博物館部会では、第5期（令和5年度）<sup>3</sup>において「学芸員の在り方について」が継続的に議題として挙げられた。今後、学芸員制度の見直しに向けた議論と検討が深まっていくことが期待される。このような状況において、現場の学芸員の声を伝える今回の調査も意義があったのではないかと考えている。

## 調査について

MRGでは部会会合ならびにメーリングリストを利用したメンバー間の意見交換・協議を経て、2023年の春に以下の質問項目をまとめた。なお、それぞれに「枝」の質問がぶら下がっているのだが、紙幅の都合でここでは割愛する。

Q 1 博物館の専門的職員としての学芸員の専門性はどうかあるべきと考えるか

Q 2 学芸員資格制度は必要か

Q 3 博物館の専門的職員は「学芸員」だけでよいか

Q 4 「調査研究や学会発表」「日博協や全美の活動への参加」「他の美術館や画廊の展覧会を見る」ことなどは出張が認められているか、休暇取得か

Q 5 自分が履修した学芸員資格課程の内容は、実際に現場に入ってみて十分だったと考えられるか（カリキュラムの内容、博物館実習など）

Q 6 文化庁の学芸員研修プログラムなどがあるか（海外派遣を含む）自分のスキルアップ、経験値を上げるうえで現状の仕組みは有効と考えるか

Q 7 上級（専門）学芸員資格制度は必要か

実際の聞き取り調査は2023年5～8月に、MRG部会員のうち8名が手分けして実施した。全国美術館会議の会員から数十館を選び、対面や電話、メール等で聞き取った。その結果、北海道から九州まである程度の地域バランス、国公私立の設置者別、そして施設規模の大小などを配慮しつつ、44館に所属する館員の中から回答を得ることができた。秋から年末にかけてその回答内容を7人で整理・分析し（ひとりが1問ずつ担当）、2024年1月に開いた部会会合でその内容を共有すると共に、調査結果の公開・活用方法について協議も行った。全国美術館会議ウェブサイトでの発表はその結果の一つである。

## 調査結果とこれから

ウェブサイトに掲載したレポートは「前説」（本誌掲載は基本的にこれを圧縮したもの）と質問1～7に対する回答の分析とまとめから成っている。

その「前説」にも記したことであるが、忌憚のない意見を聴くために、館の公式見解

を求めるような聞き取りは行っていない。あくまで聞き取りに応じた個々の館員の意見・見解であるという点はご理解いただきたい。中には匿名（館名・氏名とも）を条件に調査に応じた例もあつたため、レポートでも個々の館名や氏名は伏せてある。44館というサンプル数も少なく、統計的分析資料とするには不十分な調査である点は否めない。しかし、ある程度現場の率直な声を拾い上げることができたのではないだろうか。

回答結果を見渡してみると、例えば、学芸員という資格は必要だという意見が多数派である一方、それでは学芸員の専門性とは何かという点については認識や見解が様々ではないというところが見られた。ある程度事前に予想できたことではあるが、やはり館の規模・職員数・設置主体の違いによって現状や課題が異なる点は大きい。さらに、質問事項によっては、たとえばQ6の研修プログラムに参加した実体験が聞き取り対象者にあるか否か、Q7の上級（専）学芸員資格制度（日本学術会議の提言などに盛り込まれた考え方）に事前知識や理解があるかどうか、といった前提の違いで回答に差が見られたことも事実である。

こうした現場からの声を足掛かりとして、全国美術館会議の会員に限定せず、美術館学芸員に関する課題を広く可視化して議論を誘発していくことが重要ではないかと考えている。学芸員制度の見直しが始めている現在、美術館の現場にとって制度が改善されないように現場からの発信に努めていくことが必要である。学芸員資格制度の根拠である博物館法はその名の通り全分野の博物館を対象としているわけであり、美術館ならではの課題や現状について（必ずしも他分野の館では認識していないであろう）、美術館界の外へ向けて広げていくことも大切であろう。

M R Gとしては、レポートの発表をゴールとするのではなく、今後、何らかの形でなる議論や意見交換の場を作っていきたいと考えている。

1 「博物館法制度の今後の在り方について（答申）」 <https://www.zenbi.jp/files/2021/bun11227.pdf>

2 「博物館法制度の今後の在り方について（答申）」に関する全国美術館会議事務局からの報告 [https://www.zenbi.jp/data\\_list.php?g=3&c=743](https://www.zenbi.jp/data_list.php?g=3&c=743)

3 第5期博物館協会（令和5年度）の内容については、<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/hakubutsukan05/index.html>を参照してください。

## クラウドファンディングの手法について

栗原祐司 *Yuji Kunihara*（個人会員）

周知のとおり、国立科学博物館では、2023年8月7日から11月5日までの約3ヶ月間にわたって目標金額1億円のクラウドファンディングを実施した。その結果、開始後わずか9時間で目標を達成し、最終的に支援総額・支援者数ともに国内クラウドファンディング史上最高値となる5万6千人以上の方々から約9億2000万円のご支援をいただいた。このことは、ある意味嬉しい誤算であり、ご支援いただいた方々から感謝申し上げる次第である。

なぜクラウドファンディングを行わなければならなかったか。全国各地の美術館でも同じ状況だったと思うが、コロナ禍で休館や活動の縮小を余儀なくされた結果、入館料収入が激減し、ロシアのウクライナ侵攻等世界情勢の影響によって光熱費や原材料費等の高騰が運営費を圧迫したためである。当館でも、これまで年間2億円程度であった光熱費が、令和5年度は約2倍の4億円にまで跳ね上がる<sup>1</sup>ことが予想され、特に標本・資料を保管する収蔵庫を有する筑波地区では温湿度管理が必要なため、光熱費の6割弱を占めている。このような状況の中、企業等に寄附のお願いをするなどして財政難を

乗り切ろうとしたが、折しも新しい収蔵庫を筑波地区に建設中であつたこともあり、全館的に緊縮財政を実施することを余儀なくされたのである。国からの追加予算も期待できないことから、令和5年度は赤字が見込まれることが明らかになり、収蔵庫の完成も先が見通せないかなり悲観的な状況の中で、もはやこれ以外は選択肢がないという判断で、クラウドファンディングに踏み切つたのである。当館がクラウドファンディングを実施するのは初めてではないが、具体的なプロジェクトに対する支援要請ではなく、博物館が担う機能の根幹に係る経費について支援を集めることは難しいだろうという意見が多く、館内でもこれほどの成果を予想する者はいなかつたのも事実である。

筆者なりにその要因を分析すると、まずは国立科学博物館の150年近い歴史の蓄積の中で、子どもからお年寄りまで当館の取組や歴史そのものを評価いただき、ご信頼をいただいていたことが大きいことは間違いないだろう。その結果、当館が国立博物館でありながら財政難にあるということが驚きをもって受け取られ、まさに救いの手を差し伸べていただいたということである。もう一つは、逆になぜ国立の施設なのに財政難なのかという、いわば義憤の念からご支援いただいた方々も一定数おられることは、お寄せいただいたメッセージからも読み取ることが出来る。そして、館長や研究員等によるふだんは非公開の筑波の収蔵庫バックヤードツアーへの参加や、当館の全研究者が標本を選び、解説したものを1冊にまとめたオリジナル図鑑等、厳選した約40種類の返礼品（リターン）が好評を博したということも利用の一つとして挙げられるだろう。

目標金額を大きく超えたクラウドファンディング支援金の使途については、返礼品、手数料、事務費等に使用する間接経費を除き、約6億円を活用することができ、主に当館のコレクションの充実・管理や、他館と協働したコレクションの充実、標本・資料収集意義の発信等を実施することとしている。なお、クラウドファンディングによるご支援だけでなく、その効果として、従来から当館で行っている賛助会員や一般寄附等の

ファンドレイジングに対しても、多額のご支援をいただいた。さらに、篤志家からの大口寄附もあり、当館の取組が広く知られることによる問い合わせ、申込みは、今なお続いている。波及効果として、当館への入館者数は令和5年度はコロナ禍前に戻ることが確実となっている。

今回のクラウドファンディングの効果として、前述の通り当館の存在意義を確認することができたこと、展示を見るだけではない博物館のバックヤードでの研究や収蔵庫等の重要性を広く一般の方々に周知することができたことが大きいだろう。とはいえ、国立科学博物館の自己収入比率は2割程度であり、クラウドファンディングによって得た資金もいずればなくなるものである。国からの運営費交付金が減少傾向にある中、今回ご支援いただいた多くの仲間とともに、引き続き円滑な博物館運営に努めていかなければならない。

今回の成果を踏まえ、様々な博物館や独立行政法人、団体等から様々なヒアリング要請を受けている。しかし、筆者が心配しているのは、他の美術館や独立行政法人等において、当館の取組が経費削減のための好事例と見なされることだ。今回のクラウドファンディングは、館の運営危機に直面して必要に迫られて行つたものであり、本来、博物館が担う機能の根幹に係る経費は設置者が担うべきであろう。また、今回はタイミングなど幸運に恵まれた面もあり、誤解を恐れずに言えば、二匹目のドジョウはいないと考えている。そもそも、クラウドファンディングに頼つて経費削減を行おうという発想は、本末転倒であることを認識しておく必要がある。より円滑な博物館運営や質の高い研究を行うために外部資金を獲得することの必要性は否定しないが、当館のような150年近い歴史のある大型館の事例や、寄附文化や税制が異なる海外の事例をひきあいにし安易にクラウドファンディングの手法によって自主財源の獲得を求めようとする発想は、美術館の社会的な使命・役割を愚弄するものとして、館長はじめ職員が束になつて

論破する必要があるだろう。

来館者や市民の方々が美術館を安心して利用でき、美術館の収集、保管、修理、教育等の機能を理解していただき、信頼される高い学術性と包摂性を有することが何よりも重要であり、そのことが美術館の持続可能な運営につながっていくのではないか。そのためには一過性の寄附に頼るのではなく、まずは美術館の機能に対する理解と安定的経常的な予算の計上の必要性を、設置者とりわけ財政当局にしっかりと説明する必要があるだろう。

## 池田満寿夫アトリエ作品の行方

五十嵐卓 Masaru Igarashi (個人会員)

今年には芸術家の池田満寿夫(1934-1997)の生誕90周年である。「とびたつとき

池田満寿夫とデモクラートの作家」展が全国(和歌山県立近代美術館、宇都宮美術館、長野県立美術館、広島市現代美術館)巡回したのでご覧になった方も多いためであろう。池田は長野県長野北高等学校(現・長野県長野高等学校)在籍時から油絵を描いていたが、東京藝術大学の受験に3度(油絵1回、彫刻2回)失敗、その後、画家の鬚嘔や瑛九と交流し、ほぼ独学で版画技術(木版、ドライポイント、エッチング、リトグラフ、シルクスクリーン等)を習得した。

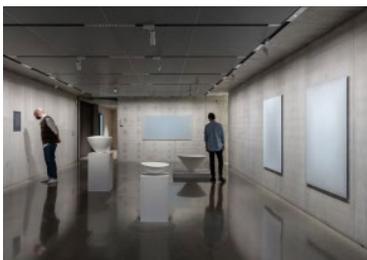
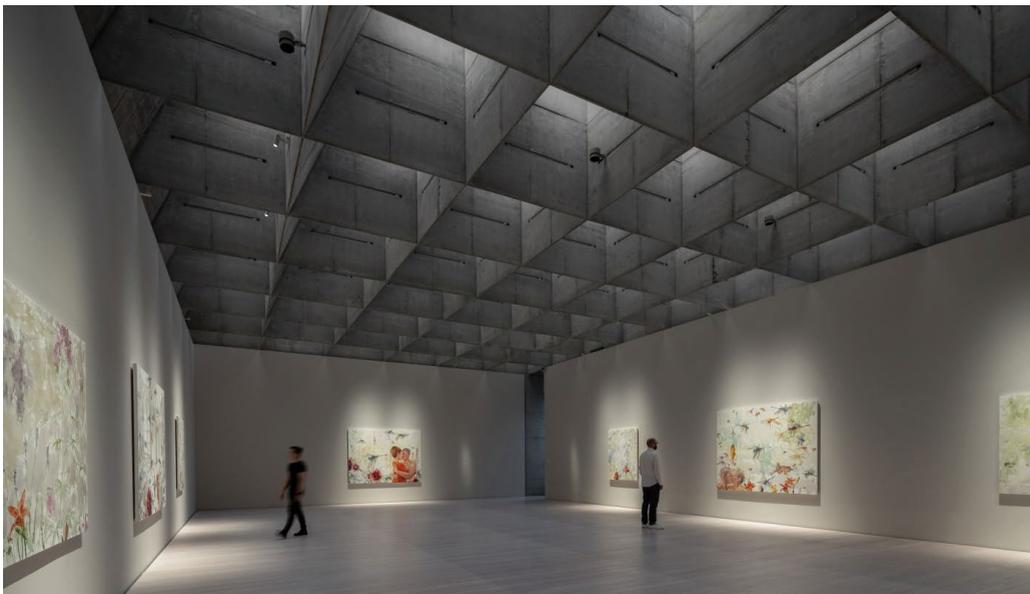
池田満寿夫は油絵、版画、陶芸、彫刻を制作し、小説や随筆を執筆、自らの脚本に基づき2本の映画を監督した。テレビにレギュラー出演し、役者としても活躍している。この多才ぶりが正当な評価を得られなかった一因であり、没後は知名度が下がっているようである。

最大に評価すべき彼の功績は版画作品であろう。第2回東京国際版画ビエンナーレ展(1960年)で文部大臣賞、第3回同展(1962年)で東京都知事賞、第4回同展(1964年)で国立近代美術館賞、第2回パリ青年ビエンナーレ(1961年)版画部門優秀賞、ヴェネツィア・ビエンナーレ(1966年)版画部門国際大賞を受賞し、「シンデレラボーイ」として美術業界で脚光を浴びるようになる。幸運はさらに重なっていく。東京国際版画ビエンナーレ展の国際審査員であったドイツ人のヴィル・グローマンがヨーロッパで、またニューヨーク近代美術館のウィリアム・リーバーマンがアメリカでの彼の活動を支援したのである。1965年にはリーバーマンがニューヨーク近代美術館で「池田満寿夫個展」を開催し、その後ジャパン・ソサイエティとフォード財団の奨学金を得て滞在し、ニューヨークの画廊と契約する。1967年にはグローマンの推薦でドイツに留学、ドイツ・アカデミー交流機構から奨学金を得てベルリンでも制作する。

これらの華々しい躍進を支えた歴代伴侶の功も忘れてはいけない。最初の妻である11歳年長の下宿屋の娘の大島麗子は小金井にアトリエ付きの新居を建て、詩人で英語教師だった1才年下の富岡多恵子は海外で通訳となり、西脇順三郎、澁澤龍彦、瀧口修造らとの交際に繋がる。9歳年下のアメリカでの妻リランは現地での生活や交渉を支えた。最後のパートナーである15歳年下のヴァイオリニスト佐藤陽子の支援で彼は舞台演出や陶芸まで芸域を拡げる。

1977年に小説『エーゲ海に捧ぐ』で芥川賞を受賞、スターの座を射止めた池田満寿夫はテレビ出演などで著名人となり、彼の版画、陶芸、彫刻作品は注目の的であった。1997年に63歳の若さで死去、佐藤陽子も2022年に亡くなり相続人はいない。佐藤陽子が1997年に熱海市に寄贈した旧宅は「池田満寿夫・佐藤陽子創作の家」となり、2007年に熱海市に寄贈した陶芸アトリエ「満陽工房」は「池田満寿夫記念館」となり一般公開されている。これらの2施設は、2023年から5年間、ジェイアール

ドイツのエルコ社(ERCO)は、LED技術を用いた建築用照明器具の国際的リーディングカンパニーです。1934年に設立され、1960年代にはヨーロッパにおける建築照明のパイオニアとなりました。現在、世界約55カ国に営業拠点およびパートナーネットワークがあり、約1,000名のERCOスタッフが、持続可能な照明器具の開発と発展に取り組んでいます。



### Optec - あらゆる空間に対応するスポットライト

Optecは、どのような用途にも対応します。さまざまな器具サイズと、パリエーション豊かな配光の組み合わせは、ハイコントラストのアクセント照明から展示物への投光照明、壁面をムラなく均一に照射したり、印象的な効果をもたらす鋭いビーム照射も可能とし、美術館や博物館、ギャラリー等の照明設計に最も適したスポットライトです。

Optecなら、照明のあらゆるニーズへの対応が可能です。革新的な光学設計により、効率性と快適性を兼ね備えています。灯体と電源ボックスが分離した器具のデザインは、完璧で優れた熱管理システムと性能を確保すると同時に、直方体と円筒の組み合わせがシンプルかつコンパクトでクラシックな視覚的印象を作り出しています。

## Light & Licht

ERCO リプレゼンタティブ パートナー  
ライトアンドリヒト株式会社

〒105-0014 東京都港区芝2-5-10  
Tel.: 03-5418-8230(代表)  
E-mail: info.jp@lightandlicht.com



Design and application:  
[www.erco.com/optec](http://www.erco.com/optec)



QRコードよりOptec  
スポットライトの情報が  
ご覧いただけます。  
(英語サイト)

芸術家の相続人が的確に対応できれば良いのであるが、相続人がいない場合、関係者が対応しなければならぬ。美術作品と著作権管理の継承問題は、美術館にとっても重要であり、今後益々関与の可能性があるのではないかと考えている。

アーカイブ資料に関しては、東京文化財研究所に寄託することができ、事前に整理する必要がある。また著作権管理に関しては、日本美術家連盟に委託することを検討している。

ある長野県立美術館には池田満寿夫両親主治医の黒田コレクションが収蔵されている。所縁のある長野県内や静岡県内の美術館、版画専門美術館等に収蔵の可能性について相談している。池田満寿夫は多摩美術大学の客員教授を務め、専任教授になる直前に急逝したこともあり、多摩美術大学には収蔵の方向で調整して頂いている。また陶芸作品は国立工芸館はじめ複数館にお伺いしている。

アーカイブ資料に関しては、東京文化財研究所に寄託することができ、事前に整理する必要がある。また著作権管理に関しては、日本美術家連盟に委託することを検討している。

現在、熱海の海を臨む400㎡の池田満寿夫アトリエに残された作品整理のボランティアをしている。相続権者はおらず、池田満寿夫と佐藤陽子が所属していたM&Y事務所がアトリエを空にして熱海市に寄贈しなければならぬからである。大量の油彩、版画作品が額装及びマップケースに収納され、挿絵や表紙絵を担当した雑誌も大量にあり、原稿・書簡・写真などアーカイブ資料の保存も検討しなければならぬ。

東日本企画が指定管理者となっている。

また、1997年に竹風堂が長野市松代町に開設した池田満寿夫美術館は2017年に閉館となり、収蔵作品は収蔵庫で眠っている。版画作品はマルチプルであり、池田満寿夫のほぼ全版画は長野県立美術館に既に収蔵され、京都国立近代美術館にも約800点のM&Yコレクションが収蔵されている。

# 世界の名画を 安心・安全に

## 株式会社 ギャラリー ためなが

東京 〒104-0061 東京都中央区銀座 7-5-4  
TEL 03-3573-5368

大阪 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-1 ホテルニューオータニ大阪 1 階  
TEL 06-6949-3434

京都 〒605-0991 京都市東山区上堀詰町 265-7  
TEL 075-532-3001

パリ 18, Avenue Matignon, 75008 Paris  
TEL 01-42-66-61-94



**galerie taménaga**  
depuis 1969

WEB [www.tamenaga.com](http://www.tamenaga.com)  
Email [gal@tamenaga.com](mailto:gal@tamenaga.com)

### 美術品販売

近現代作家を中心とした多岐にわたるコレクションから、お客様のニーズに合った作品をご提案いたします

### 輸入代行

世界中の美術品が集結するパリ。50 年以上かけて築き上げた現地のネットワークを活かし、作品の購入・輸入のお手続きを代行いたします

### 作品貸与

これまでに紹介してまいりました近代絵画から現在活躍中の所属作家まで、様々な作品の展覧会への貸し出しを承ります

### 時価査定

半世紀以上の経験から成る厳密かつ公正な評価で、コレクションの真価を明らかにいたします

# Study:

## Study:大阪関西国際芸術祭

Study: Osaka Kansai International Art Festival

2025 年 4 月 ————— 2025 年 10 月

## 全国の連携美術館募集中

大阪関西万博には、2820 万人の来場者と 350 万人の海外からの来場者が見込まれています。これらの来場者には、大阪関西国際芸術祭だけでなく、全国の美術館や芸術祭にも訪れていただきたいと思います。そこで、本芸術祭と連携する企画やアートツーリズムで一緒できる美術館を現在募集しています。ご興味のある方は、ぜひお気軽にお問い合わせください。ご登録いただいたキュレーターの方々にはご招待や VIP 情報等をお送りしますので、是非ともフォームよりご登録ください。



登録フォーム

よりそい、つよく、ささえる。

**IKARI**



## エコミューア FTプレート

文化財虫菌害  
防除薬剤認定  
第26号

イカリ消毒オリジナルの蒸散タイプの防虫剤。  
人体への安全性が高く、少量で効果を発揮します。  
効果はなが〜1年間。  
迷惑な文化財害虫を撃退します。



**IKARI**

**イカリ消毒株式会社** <https://www.ikari.co.jp>

本社 | 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11 TEL. 03-3356-6191 FAX. 03-3350-1405  
大阪オフィス | 〒542-0076 大阪府大阪市中央区難波5-1-60 TEL. 06-6636-2741 FAX. 06-6636-2720